

- 必要な機器の電源を復旧するために、放射性廃棄物処理建屋（以下、「RW 建屋」）から 1 号機及び 2 号機の Hx/B まで、また、3 号機の Hx/B から 2 号機及び 4 号機の Hx/B まで、さらには、高圧電源車から 3 号機タービン建屋大物搬入口に仮置きした動力変圧器を介して 1 号機及び 4 号機の Hx/B まで仮設ケーブルを敷設した。電源復旧の優先順位は、各号機の D/W 圧力などのパラメータの推移からプラント状況を評価し決定した。その結果、当初は 2 号機を優先し対応することとしてケーブル敷設を開始したが、その後、パラメータ推移の変化による評価に基づき、1 号機を優先するよう変更した。
- 仮設ケーブル敷設にあたっては、社員と発電所構内協力企業、及び各店所から集結した配電部門（社員と協力企業）でそれぞれ約 40 名の混成チームを結成し、余震が発生する中、また津波の影響による瓦礫が散乱している中で作業を行った。号機によっては夜間の作業となり、真っ暗であったためヘッドライトを頼りに作業を行った。
- 仮設ケーブルは太さ 2～3 センチのものが 3 本 1 組によられており、長さ約 200 メートルの場合で重量は 1 トン以上になる。RW 建屋から Hx/B まで、最長で約 800 メートルもの距離を敷設する必要があった。通常なら機械を使用して相当の日数をかけて敷設する作業を、人力にて急ピッチで行い、総延長距離約 9 キロメートルの仮設ケーブル敷設を 12 日に一部、大部分を 13 日に実施し完了した。
- 1 号機の非常用機器冷却系ポンプの一部は、モータの洗浄を実施したが絶縁抵抗が回復しなかったため、三重県から自衛隊の輸送機でモータを福島空港まで空輸した。空港から発電所にモータが到着後、直ちに取り付け、仮設ケーブルとの結線を開始し、13 日夕方までに作業を終えた。
- 4 号機の非常用機器冷却系ポンプの一部のモータについては、絶縁抵抗が回復しなかったため、モータの分解点検と取替準備を平行で実施した。分解点検の結果、既設モータは使用できないことが判明したため、柏崎刈羽原子力発電所から陸送したモータを使用することとした。モータの搬入にあたっては、4 号機 Hx/B の扉



仮設ケーブル敷設準備
(作業状況は後日のもの)



ポンプモータ復旧作業
(作業状況は後日のもの)